

Ⅱ 遺 跡

1 遺跡の概観

調査地は、東に東一坊大路、北に三条条間路が通る左京三条一坊十四坪の東北部にあたり、当該坪東北の条坊交叉点の対角には長屋王邸がある。奈良時代において、平城宮に近接した左京三条一・二坊は一等地であり、Ⅰ－Ⅱでみたように、周辺の調査例では、貴族の邸宅や宮外官衙とも想定される遺構の存在が確認されている。また、かつて十四坪西辺で実施した第46次調査では、築地塀とそれに開く棟門、総柱式高床倉庫や多数の掘立柱建物、あるいは池の一部かとも考えられる遺構等を検出し、築地塀で画された坪内の状況の一端が明らかになっている。

調査地の旧地形は、奈良盆地の北を限る奈良山から平城宮の南にのびる丘陵のきわめてなだらかな東南傾斜面上に位置し、平城京廃絶以降は水田となったと考えられる。その後、工場建設に際し厚く盛土がなされ、今日に至っている。調査前の標高は約61.0～61.1mで、ほぼ平坦である。

基本的層序は、約40～50cmの盛土以下、旧水田耕土、床土と続き、現地表下約70～80cmで淡茶灰褐色砂質土の遺構検出面となる。遺構検出面の標高は、60.30～60.35mである。

2 遺 構

第249次調査区では、掘立柱塀8条、掘立柱建物12棟、素掘溝16条のほか若干の遺構を検出した。以下に概説しておく。

A 掘立柱塀

SA5635 発掘区南半の西壁に沿う位置で、南北方向の柱列を3間分検出した。柱間寸法は、10尺等間である。後述するように、SA5635の4つの柱穴は、SB5631の南半3間分の柱穴と東西方向でほぼ筋をそろえている。しかも、棟通りに残る柱穴の痕跡から、この南半部分は3室に間仕切りされていたことがわかる。したがって、SA5635はSB5631居室部分の目隠し塀であった可能性が大きい。あるいは、SB5631は居室領域にのみ西庇をともなっていたのかもしれない。

SA5641 4間以上の東西塀。発掘区北寄りに位置する。柱間寸法は9尺だが、西から3間めだけが8尺と短いので、ここを門とした可能性がある。東端および東から2つめの柱穴には、底径25～27cmの柱根が残っていた。

SA5642 2間以上の南北塀で、柱間寸法は9尺等間。SA5641の東端の柱に取り付き、鍵の手に折れる。SA5641が発掘区外に続く可能性もあるので、その場合には、T字形につながることになる。

SA5643 3間以上の東西塀で、柱間寸法は4～7尺とばらつきがある。SA5641と重なるようにして、そのわずかに北側に位置する。遺構の重複関係からみると、SA5641よりも新しい。SA5644とは柱筋をそろえており、この2つの東西塀の間は11尺あく。

SA5644 1間以上の東西塀。SA5643と同一線上にある。柱間寸法は4尺。

SA5664 1間の南北塀と思われる。柱間寸法は8尺。発掘区南西寄りに位置する。目隠し塀もしくは棟門の遺構と思われるが、後者の可能性は小さいといえよう。

SA5668 2間の南北塀で、柱間寸法は9尺等間。遺構の重複関係からみると、最も古い時期の柱列と考えられる。

SA5669 発掘区中央から東へのびる2間以上の最も古い時期の東西塀。柱間寸法は7尺等間。

B 掘立柱建物

SB5630 桁行7間×梁間3間の東庇つき南北棟。発掘区中央東寄りに位置する。身舎の柱間寸法は、桁行方向が10尺等間で、梁行方向が8尺等間。庇の出は11尺と長い。身舎東西の両側柱列では、北端および北から2つめの柱穴に、底径28～32cmの柱根が残っていた。また、東拡張区で確認した東庇の柱列においても、やはり北端および北から2つめの柱穴に柱根が残っていた。遺存状態はよくなかったが、身舎の柱根より、一まわり小さいと考えられる。

SB5631 発掘区中央の大きな南北棟。東庇のついた桁行7間×梁間3間の平面で、身舎の柱間寸法はSB5630と同じであるが、庇の出のみ9尺と短い。身舎の南側3間分には、棟通りに間仕切り用の柱の痕跡が残っている。したがって、身舎は北側4間が「堂」的な広間で、南側3間が3つの「室」に区切られていた可能性が大きい。すでにのべたように、西に8尺離れた位置にある南北塀SA5635はSB5631南半3間分と柱筋をそろえており、居室部分の目隠し塀もしくは居室に附属する西庇の柱列の可能性がある。遺構の重複関係からみると、SB5630より古い。建物方位は、北でわずかに西にふれている。身舎の西側柱列の南から4つめの柱穴には、底径28cmの柱根が残っていた。

SB5632 西壁中央沿いに柱列を4間分検出した。南北二面庇をとまなう東西棟の妻柱列と思われ、身舎・庇のいずれも、柱間寸法は11尺である。桁行方向の規模は不明だが、柱掘形は約150cm四方もあり、正殿クラスの建物とみてよからう。南から2つめの柱穴には、底径28cmの柱根が残っていた。また、北から3つめの柱穴では、底径30.5cmの柱根の底に40×27×15cmの角材を敷いて礎板としていた。

SB5633 桁行1間以上×梁間2間の東西棟。発掘中央西壁寄りに位置する。柱間寸法は桁行が9尺、梁行は10尺と8尺にわかれる。遺構の重複関係からみると、SB5631、SB5632のいずれよりも新しい。

SB5634 桁行7間以上×梁間2間以上の南北棟。発掘区東壁から東拡張区へひろがる。柱間寸法は桁行方向が6尺等間、梁行方向が6.5尺等間である。遺構の重複関係からみると、SB5630より新しい。西側柱列の北端に底径14cm、北から5つめの柱穴に底径20cmの柱根が残っていた。

SB5636 桁行1間以上×梁間2間以上の東西棟。発掘区南西隅に位置する。柱間寸法は、桁行方向が8尺、梁行方向が9尺等間である。遺構の重複関係からみると、SB5631、SB5637よりも新しい。妻柱の抜取り穴から塀が出土した。

SB5637 桁行1間以上×梁間2間以上の南北棟で、西に庇がつく。発掘区南東隅に位置し、SB5631と柱筋がほぼそろう。身舎の柱間寸法は桁行・梁行方向とも10尺で、庇の出が11尺とわずかに長い。遺構の重複関係からみると、SB5638よりも古い時期の建物である。

SB5638 発掘区南東隅に位置する1間以上×1間以上の掘立柱建物。南北棟か東西棟かは不明である。柱間寸法は、桁行・梁行ともに11尺。SB5638の3つの柱穴は、いずれも皿状を呈しており、遺構面からの深さが30～55cmほどしかない。SB5638とほぼ同規模の大型柱穴をもつSB5630、SB5631、SB5632、SB5637などの掘立柱建物では、その柱穴の深さが1m前後に達するものもあり、SB5638の柱穴はきわだって浅いことがわかる。しかも、穴の形態は皿状であることから、SB5638は礎石建物であった可能性も想定されよう。ただし、礎石建物の存在を示す根石等はまっ

たくみつかっていない。

SB5639 発掘区南東隅で2つの柱穴を検出した。その柱穴はSB5637、SB5638とほぼ同規模の大きなものであるから、1間以上×1間以上の掘立柱建物と推定できる。柱間寸法は9尺である。

SB5640 桁行1間以上×梁間3間以上の南北棟で、東に底がつく。発掘区北西隅に位置する。身舎の柱間寸法は桁行方向が9尺、梁行方向が6.5尺で、底の出も6.5尺である。

SB5663 発掘区北半でみつかった柱穴2個、柱間1間(7尺)の遺構である。目隠し塀か棟門のいずれかと考えられる。建物との位置関係から、棟門であるとしたならば、左右に築地塀をともなっていた可能性が大きい。

SB5665 発掘区南西隅で、西壁沿いに柱穴列2間分を検出した。東西棟の妻柱列である可能性が大きい。柱間寸法は9尺等間。

C 溝

あわせて16条の素掘の溝を検出したが、そのうち14条は耕作用の溝で、以下の2条のみが奈良時代以前の遺構である。

SD5661 発掘区北西隅を流れる斜行溝。遺物は出土していないが、古墳時代の溝と思われる。幅30～100cm、長さ5m以上。

SD5652 SD5651の南3.3mのところを流れる奈良時代の東西溝。幅約20cm、長さ3m以上で、遺構の重複関係からみると、SB5630、SB5631よりも古い。

D その他

SK5645 発掘区北東隅の大きな不整形土坑(6m以上×3.5m以上)で、鉾・炉壁・壁体や炭が大量に出土しており、金属鑄造工房のごみすて穴の可能性が大きい。遺構の重複関係からみると、SA5642よりも新しい。

SK5660 南拡張区でみつかった不整形土坑(1.5m×2m)。奈良時代中頃の土器が出土した。遺構の重複関係からみると、SB5637より新しい。

SK5662 発掘区北西隅の浅い不整形土坑(1.8m×1.2m以上)。SD5661と同質の黒色土を埋土とする。遺物は出土していないが、おそらく古墳時代と考えられる土坑である。

SK5666 発掘区中央北寄り、東壁沿いの小型の土坑(0.7m×1.3m)。

SX5670 発掘区南寄りの東壁沿いでみつかった土器埋納遺構。胞衣壺を納めていた。

SK5671 発掘区東半中央北寄りの小土坑。須恵器碗Aが出土した。

Tab. 2 第46次発掘調査 建築遺構一覧

番号	構 造	方向	規 模	柱 間		庇		備 考
				梁間	桁行	位置	出	
SA201	築地塀	南北	幅約 2 m					左京三条一坊十四坪の西面築地塀。北部に寄柱の痕跡がのこる。
SA240	掘立柱塀	東西	5 以上		9.5			柱穴 6 個検出。
SA241	掘立柱塀	東西	6 以上		9			柱穴 7 個検出。SA240のすぐ南側。
SA270	掘立柱塀	東西	6 以上		7~8			柱穴 7 個検出。柱穴は小さく、柱間寸法にも長短がある。 築地塀 SA201にとりつく。
SA330	掘立柱塀	南北	8		9			SB320、SB350より古い。
SA388	掘立柱塀	南北	4 以上		7			道路側溝 SD385下層で検出された大きな柱列。
SB202	掘立柱建物	東西	2 × 1 以上	7	7			SB203より古い。
SB203	掘立柱建物	東西	2 × 2 以上	7	7			SB202より新しい。同規模か。
SB204	掘立柱建物	東西	2 以上 × 1 以上	5	6	西	8	床張りの建物。
SB205	掘立柱建物	東西	2 × 4	6.5	7			
SB220	掘立柱建物	東西	3 × 3	7	7	南北	5.5	梁間 1 間の身舎に南北両庇がつく。
SB230	掘立柱建物	東西	2 × 6	4	6			梁間は西側は 1 間、東側は中央に柱がたち 2 間となる。
SB235	掘立柱建物	東西	3 × 2 以上	7	7	南	12	東壁沿い。
SB245	掘立柱建物	南北	3 × 5	8	7	西	10	
SB250A	掘立柱建物	南北	1		7			SA201をぬける棟門（Ⅰ・Ⅱ期）。
SB250B	掘立柱建物	南北	1		11			SA201をぬける棟門（Ⅲ期以降）。
SB260	掘立柱建物		3 × 3	7	8			総柱式高床倉庫。
SB280	掘立柱建物		3 × 3	7	8			総柱式高床倉庫。
SB290	掘立柱建物	東西	2 × ?	9				東壁沿い。東西棟の可能性大きい。
SB300	掘立柱建物	南北	4 × 5	8	8.5	東西	9	
SB310	掘立柱建物	南北	3 × 6	8	8.5	東	10	
SB320	掘立柱建物	南北	2 × 5	10	10			柱穴大きい。
SB321	掘立柱建物	南北	2 × 5	11	9.5			柱穴大きい。
SB322	掘立柱建物	南北	2 × 3	5.5	7.5			北側の妻柱穴が他の建物の柱穴に覆われている。
SB340	掘立柱建物	東西	2 × 6 以上	8	8			
SB350	掘立柱建物	東西	3 × 7	7.5	8	南	8.5	
SB360	掘立柱建物		2 × 2	7	7			2 × 2 の総柱式だが、東面中央柱を欠く。
SB361	掘立柱建物	南北	2 × 4	6.5	7			
SB370	掘立柱建物	東西	4 × 6	5.5	9	南北	8	北庇は中央の 2 間分のみ。
SB380	掘立柱建物	東西	2 × 1 以上	9	8			
SB381	掘立柱建物	東西	1 以上 × 1 以上	9.5	8.5			東西棟か。
SB390	掘立柱建物	東西	1 以上 × 6	8.5	8			妻柱の位置が東西両面で異なる。

規模は間数、柱間・庇の出の単位は尺